

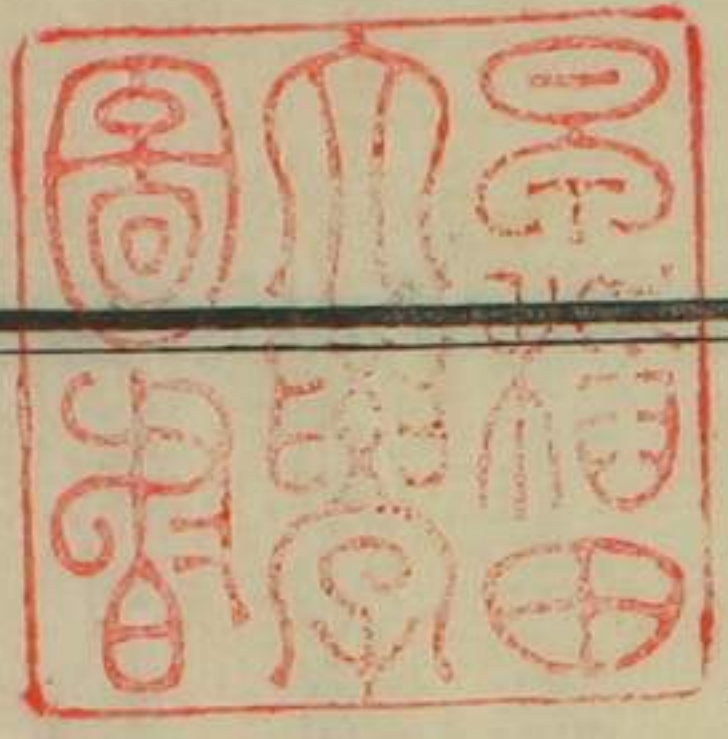


四季
州
冬
七

73
367
7



7 3
門 曾
號 367
卷 7



四季艸七之卷 冬草

目錄

雜事之部

- 空穗
- 尻籠
- 弓材
 - 檀 柘
 - 梓 檀
 - 槻
- 飭劔
- 蝦夷鋏先の事
- 辨慶七ツ道具以事
- 洗革鎧

○四季艸冬の卷目錄

〇一

明治三六年十一月十九日
市島謙吉
氏寄贈



甲曹名の考

甲曹問答

母衣問答

武士學文問答

通計十一條

四季艸七之卷 冬草

空穂の事

伴雄云此條ハ春草下標空穂の條と照合して見留候

字は本を空穂と號^{ナツテ}事ハ其中空^{ウツ}より外より毛皮を
かけたる躰粟の穂れども似ききばうつぶとひふあり
べし。東鑑卷廿六^{貞應二年九月廿九日の條}又羽壺の字を用ひる事
是ハ羽の音と壺の訓とを假里用ひる事書きたるなり。矢
の羽を入り壺ぞ。如^{カッ}き意得むと却てうつがち過る説
あるべし。又靱の字をうつぶとひるハ誤れり。本字ハ靱
はてゆきといふ字なり。字は本と靱を形異ふ故に此なり。
うつぶとは空穂の字を用ふ候。

伴雄云前々
春艸下等
説事

土俵空穂を蜷川家より作せし物なり。蜷川道
標が事を土俵に附會したる説あり。前より以て如く。
土俵空穂ハ天文の頃既に有る物なり。其より
ハ天文より以前の事あり。然るに道標の始て
作ら出さしは非ず。此事を蜷川家より問ひ試みに
道標始て造ら出して其製式家に傳へり。其答り
き。然れども其を傳へ誤り。以前より有るを道標
を巧を加へて作らる。其製式を傳へ來り
るべし。

尻籠此事

今世に用ふる所の矢壺は此製品なり。然るも古代の
者をいふに見えぬ。何を古制なるや詳ならず。義
經記よ。其の矢箸下りに負ひしと。其の矢壺は。今
の矢壺おひし。其も箸さぐりにある。古の今も同
物と思ふ。飛彈守惟久が画たり。奥州後三年合戦
に繪。土佐光信が画き。一谷合戦の繪を始し。古
代の画工のかけら繪どもを見る。其は不付け。籠壺や
あぐりぬど負ひし。さゆら見えたり。今世は用ふ
る者より似る。其負ひし繪ハ曾て見えぬ。其は古
書よ。其は。今世の者を非に。其は右の義

經記をよも今の世に矢壺の事と定めがごとし。

とてその字ハ其詞よりつきて矢籠尻籠れど音訓を假

をも書き来たをども實ハ矢壺をかき多壺胡録の事故に

平胡録を負へも苦高に好まはく。

壺やあごひハ苦下^{ハス}られはごとし。苦下^{ハス}に負さるるは矢ぬき

出^{ハス}りかごとし。古画にも武者に壺胡録おひきまき備ハ苦下

ア^{ハス}りぞ見えたる。義經記に去この矢苦下^{ハス}りておひれしと

いへは此壺胡録は事みぞあふんき。苦下^{ハス}りといへんを

て矢鏃^{サキ}を高く苦の方下^{ハス}りたるはたあらは。腋の矢を苦

高^{ハス}はおひれしとて^{ハス}に對^カへりていへんは壺やあご

ひをな^{ハス}りていへんは詞ある。

多^{ハス}かきとていへんは竹矢壺も太に竹の筒をまきぬ

きて壺胡録は如く作り作られしきまをやいへん

古代志とていへんは壺胡録の一名をうらんと云

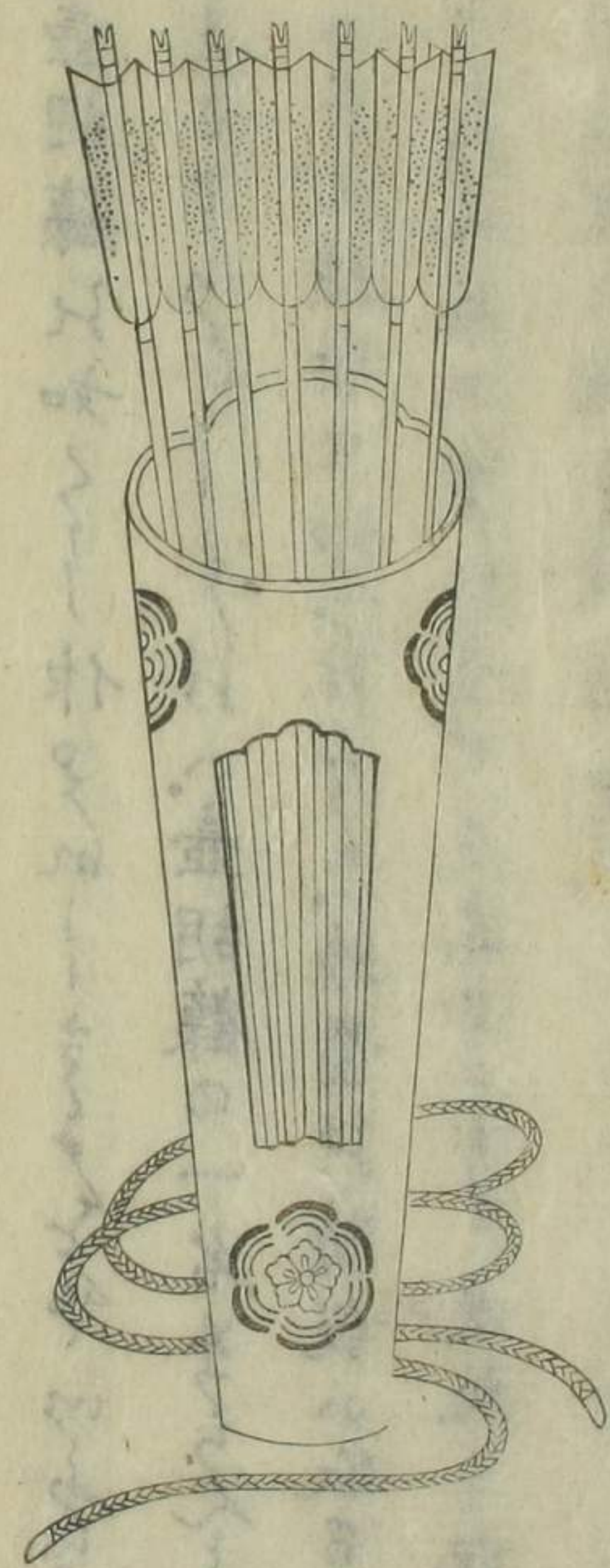
ふ事ハ予が推量にいへはなり。推量ハ臆説ハ取らみ

足らざれば無益の事也ども志をうらんとて是^カ處^カに記

おきて啟發の期を俟^カはせり。

壺胡録の圖

此圖ハ裝束圖式ヲ見せり公家及び衛府の
官は人々れを負ふ事也



此圖を飛彈守
惟久が画き奥
州後三年合戦の
繪に見えり
一人の人もあ
らばり人もあ

是を壺胡録
ハ一人名を
矢壺といふ
あるべし



四季艸冬の卷

弓材此事

弓材といふは弓に作るべき木なり。檀弓。梓弓。槐弓。柘弓。等國史その他古書に見えり。みか丸木弓に云々その木は名を以て何弓と稱はる形也。丸木弓をみか木弓といふ事もなく。雨露みか木都て木より法得て折るを以て。檀。槐。梓。柘。此れ木は性やうらうらに保たれ故に是を弓材に定然とす。継木弓も上古より有り物も是れも木竹を合せ以て付たる物をなれ。上古の軍に用はるを以て。唯的を射る時此を用ひたり。又丸木弓はそとほよく堅き物を貫く勢あり。甲

曹を透し便也。今弓材も取るべき樹を本艸類の書にも探す。又よく見知りたる人にも多し。子問ひ其樹を目みを見え。其あはれは左に記し置くなり。

檀弓

伴雄云此処に檀弓此事を説くもこれと春艸の上等し。擧げたること全く同じ趣なり。其処なるは弓に上より下まで説ひ此処は弓材の上より下まで説くも是れを天仁遠波此をいひあれど。趣意をいふは異なり。事所ら重出するもいふべし。ゆゑある。故に此事書を取捨て。画圖を以て擧げたるもの。以下梓。槐。柘。檀。桃。栗。弓の條もこれ同じ。但し槐の條を本にす。其の擧げたる事ハ其処よりいひきり。

檀葉並實圖

皮青少一赤あり

實の開く形



實開ざる形

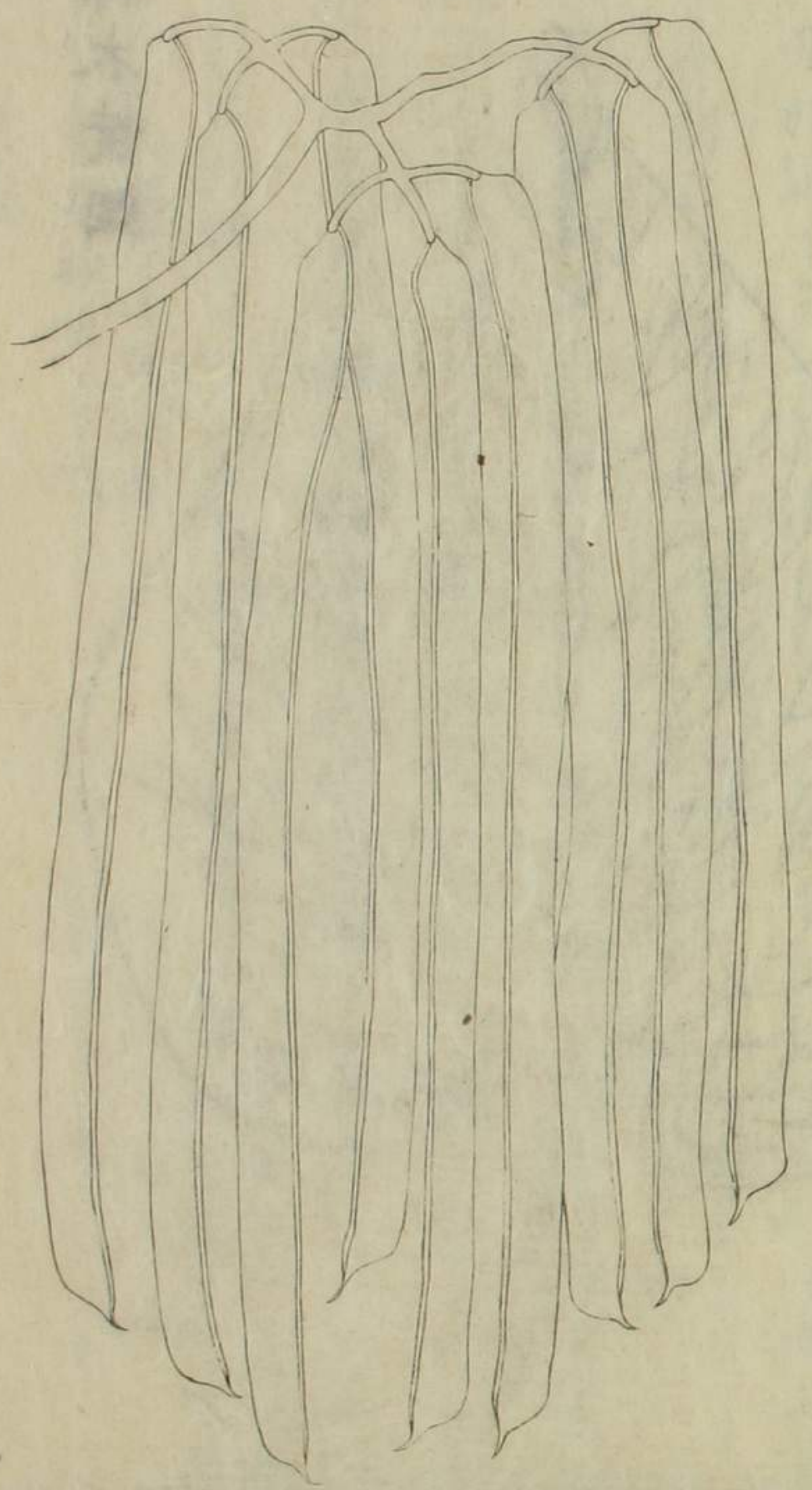


葉少厚一うまひあり

梓弓

梓一名かざら楸ともいふ

長八九寸許 これを木さくげといふ
中に毛の如くある物あり



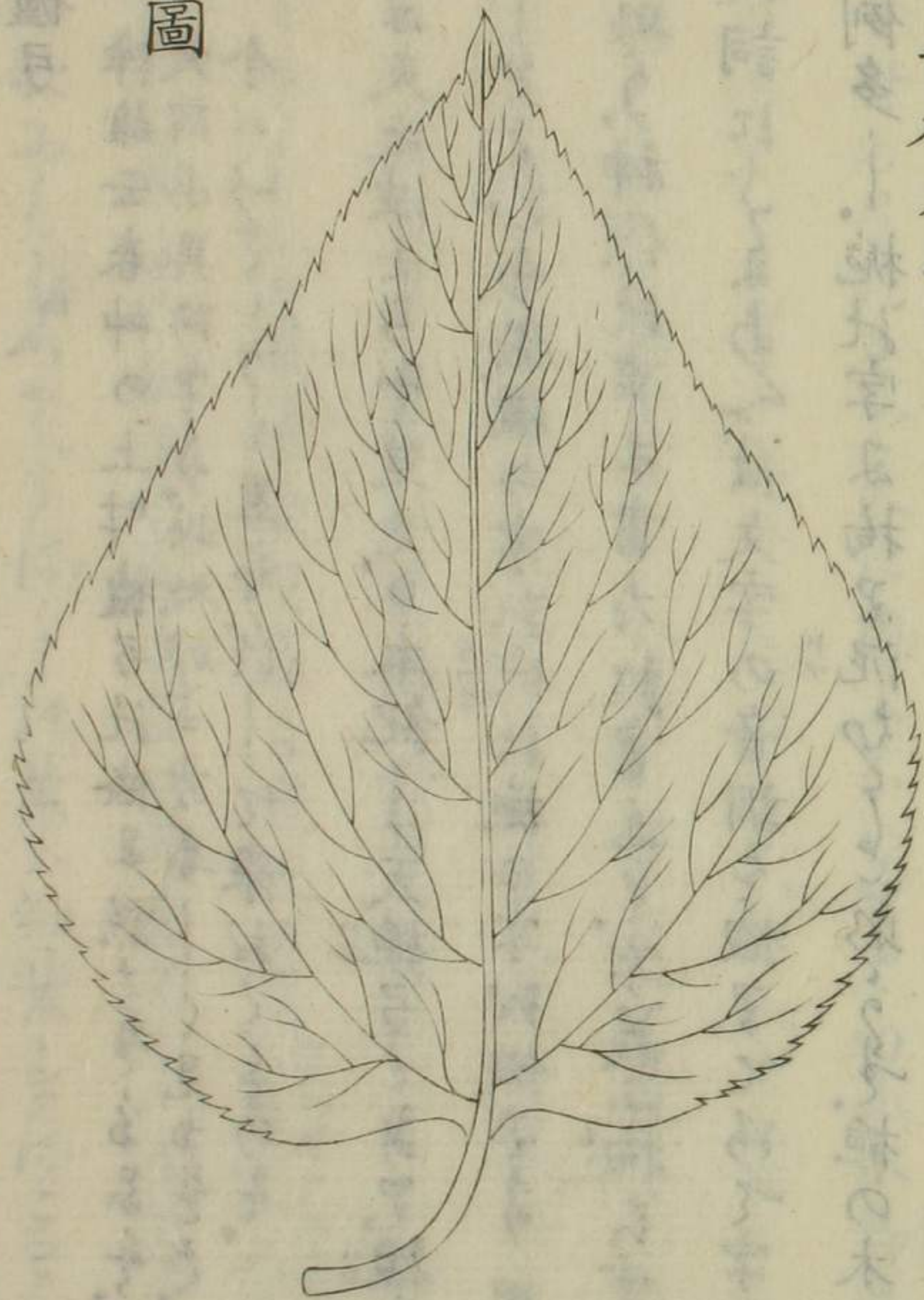
梔木葉圖



梔和名抄云和名
豆木乃木唐韻云
木名堪作弓也

柘弓

柘の字俗字は多字よむハ誤也
はげを黄楊木也



柘木葉圖

櫛弓

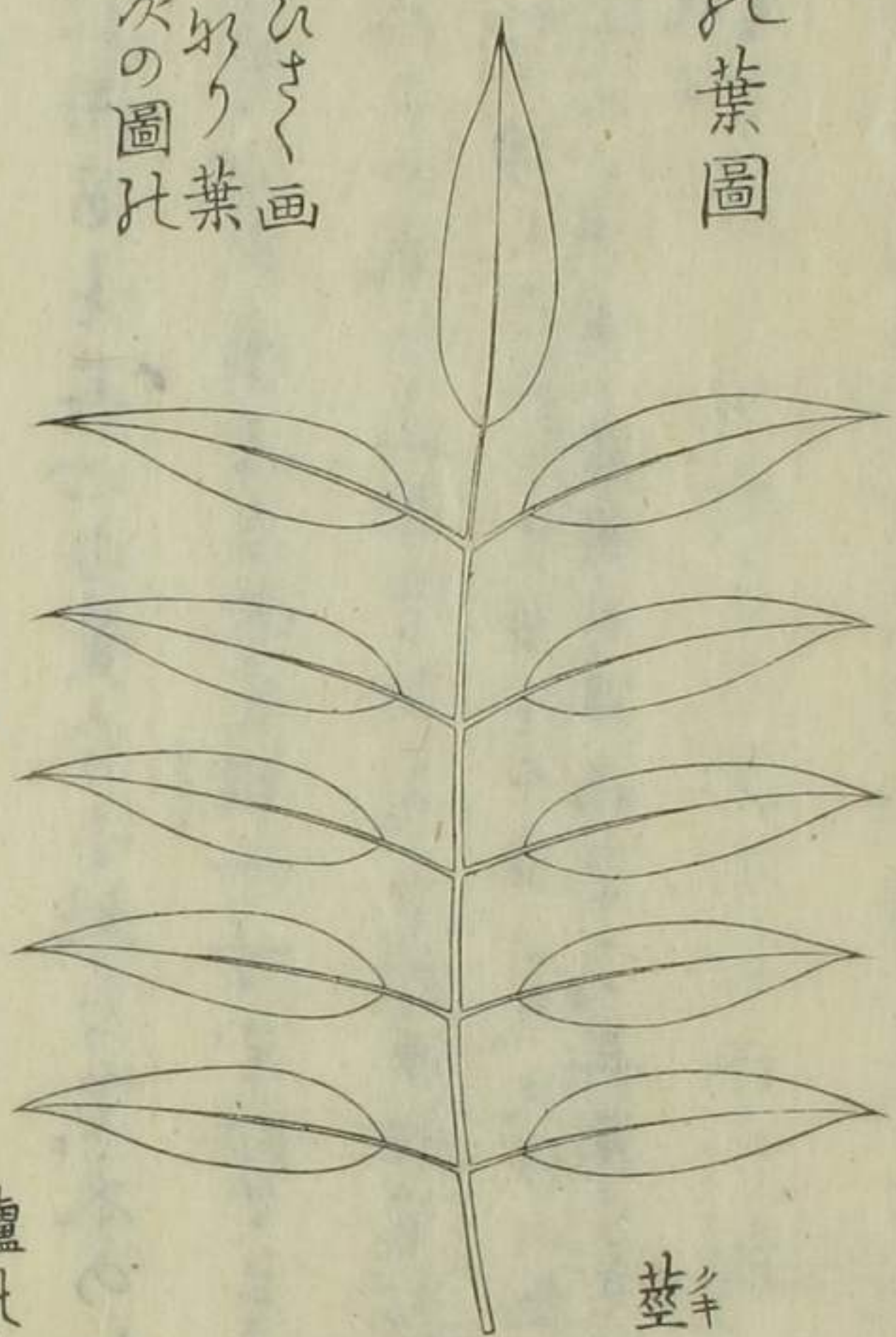
伴雄云春艸の上村櫛弓は條又説たきる多分を。大同小異阿多。此処好る方委し見あむを。今ハ以さしうも畧抄に之を擧おくものぞ。

古事記又天之波士弓也見え日本紀又天櫛弓とあり櫛も
櫛もたしとよむゆゑ櫛の字は代に櫛の字が假り用
ひきあがり。神代此事を書た紙書ふも字義不拘らず
して其詞にびあは文字の音訓を假してゆゑ字に
書ふ例多し。櫛は字も拘り泥むこと好むも櫛の木ハ
弓ふ作るべ木はとあらむ。櫛ハ弓材も互た木あり。和
名抄 漆色 櫛 落胡反和 今黄櫛木也と見えり。

波迹之を以て中略してはごとくあり。古歌みハ皆
たどとよあり。俗にはたせれ木とゆふ。昔ハはごとく轉
語あり。今世の弓はそむ木に用ふるにせといふ木即是
なり。櫛の木もろろ。此木は能似たり。身木も葉もろ
はしれ如くは多見分る。葉を形らべて見せむ
る。少く廣く櫛も少狭きがむ。多の違れ。
あつてもども秋の末み至れば櫛は葉ハ黄色なり。そ
の後赤もき。黄赤交りある色にたり。色といふ。鑑
にたどれ白ひ。終りも紅なり。是をそぐもみぢ
とゆふ。古歌みもとあり。はしれ葉ハ紅葉とゆふ。

檀の木此葉圖

是ハちひさく画
ききり葉
此大廿次の圖
如



茎長サ八九寸

此処身木に付

檀此葉の大廿
あそむど也

うほし葉よりハ少薄き方なり漆ハ少厚し

中葉の右はゆき以下此葉の形も生の葉を側におき
心方直してうほしたるれ也。武士うろん者ハ武器を作ふ
世大事。字を樹木を多く見知り置はき事也。庭な
きかこ。きり植置たきも此たる也。官も文官も
のりやま。葉の形も此の如し。葉の形も此の如し。
桃弓此事。桑弓の事。十張弓此事。
伴雄云右の三个条え。春艸此上。既に記されり。
を復此処より重出せらるり。故にこれより削り除

飭劔の事

凡太刀に飭劔と云ふ。然るに飭劔と號するも此一
種あり。何ゆゑに是は限りて飭劔と名付くややを
考ふに飭劔ハ木刀又ハ鈍刀ドシタを用ひ其外面を真
劔の如くに飭ふより此故なり。是ハ儀刀といふも
のにて多く威儀を助くる為に武備不用するは所
らばるなり。おもそ官に文官及び武官あり。文官と治
世此事を法うさざり。文道を以て治むる官をい
ひ。武官とは非常に乱を鎮むる事なつたをいふ。朝廷を
守護する事なれば法うぬまする官をいふなり。文官ハ太

刀を多く事なく武官を必太刀を帯はるを定めて法
なり。又文官に多く武官を兼る人ハ太刀を帯はるなり。又
武官を兼ぶといふと大臣など威儀を助けんが爲り
詔して太刀はく事なまらぬ事なり。是を勅授帶劔チヨウジュタイケン
といふなり。此勅授帶劔此人を文官に多く武官に多く
故に木刀又ハ鈍刀を真劔の如く飭り成して帶せらば是
を飭劔といふなり。土御門大納言通方卿ミチカタの飭抄に古物飭
劔大略木也と記してあり。木也とは真刀を用ひて木刀
を用ふる事なきをいふはあり。加此通方卿を曆仁元年五十五
歳より薨りてあり。其後頃既ハ木刀を用ふる事なくして真

刀を用ひしゆ急。古物大略と云て古今此變を知らし記
 きしる。大畧とて古物あるは木刀のいふもあら
 け鐵刀もあやしゆ急。然し不なるは鐵刀も銳刀と
 あやし鈍刀を用ひしゆ。其證ハ予ガ友橋嘉樹といふ者
 京都へ上りし時。廣橋家に代々傳へる所の真楯公マタケ房前ノボ
 子の饒劔を請ひ奉りて拜見して。其圖を寫して来て
 予に予も亦傳へ寫しぬ。此真楯公の饒劔此刃を名作ふ
 予也と嘉樹に問ひし。鈍刀ふてあるは。答ひし。是を饒
 劔と上古も。木刀又ハ鈍刀を真劔と如く饒劔とよみて
 劔と名づく家の證なり。後代も及びては鈍刀木刀此を
 用ひし。鋭刀を用ふる事ふ形りしゆ急。饒劔と云
 ふ名義は。ちからぬやうにあらざるは。是故實り。違ふ
 がゆ急。饒劔。

饒抄を數本見ふ。古物饒劔大畧木也といふ文也。也の
 字又土偏を加へる地の字に作る本も有る。又ハ木地
 也と書たる本もあや。これらも皆傳寫の誤りありし。
 西三條裝束抄饒劔の條。鞘サヤを大畧木地此由あるせ。と
 有る。これ饒抄は一本に木地とあるは。據りて記し給
 へし。然れども加の一本のみ。鞘の字を無く木地と
 あはし。とて。木地といふは。鞘此事なるは。と推量

〇四季の巻
〇十三
しを更し朝比字を添て記しあひしと却つて何やま
りたり。是饒劍の饒比字の故實を辨へ知りあをせりし
故なるを盡し。

儀刀を右ふ記し多る威儀イギを助くる爲に帶する太刀
その事如く威儀とはけりうきよそあひあす。其威儀
を助るは身を饒る比理を名爲。儀刀の二字をすあわち
かきりたる畧してかぎことよても其義通じべし。然れども
本を其及ハ比真偽シンギと出たる事如く。

蝦夷鉄先比事

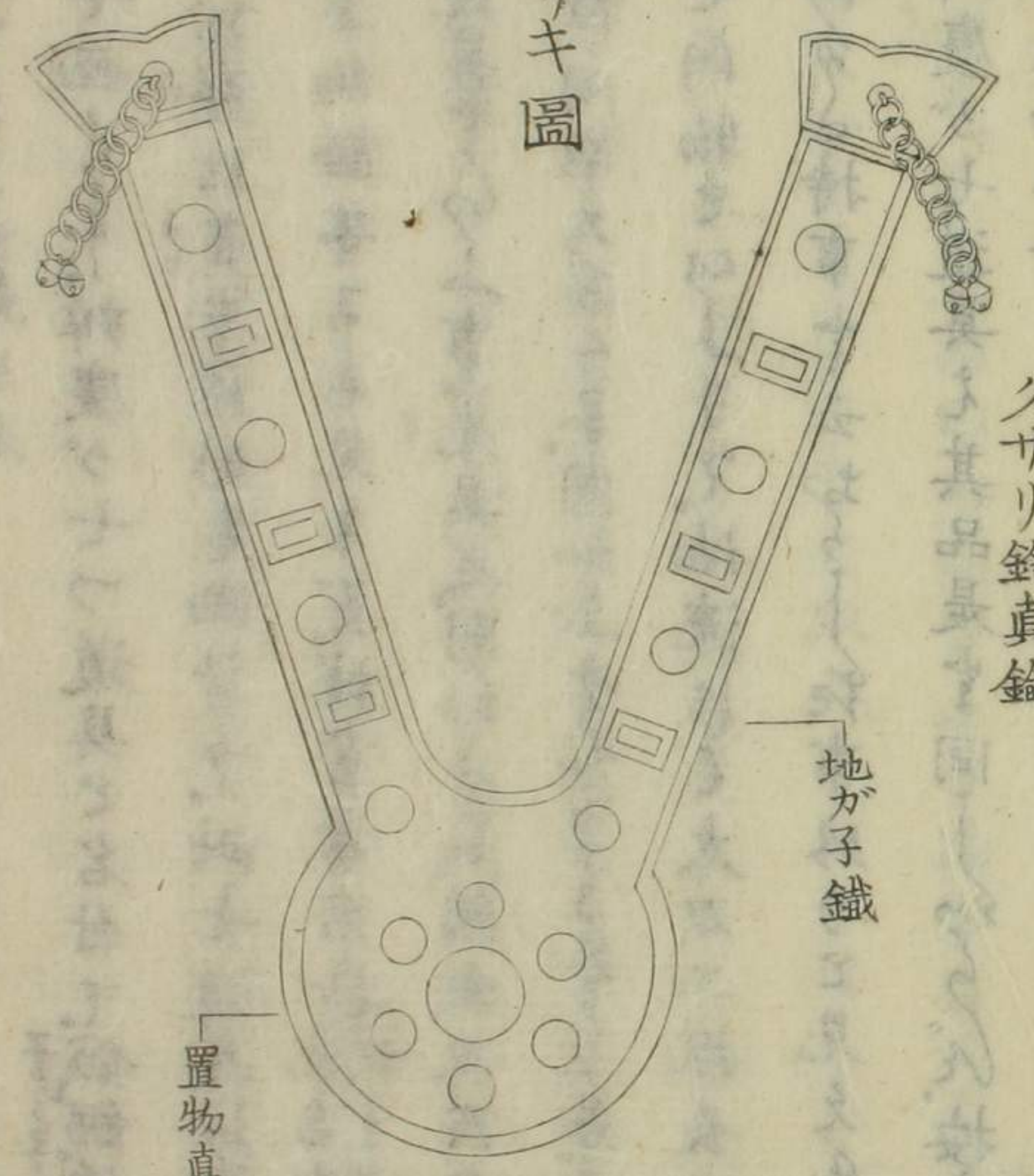
蝦夷の國は人の寶物よりくちがれたる物なり。其繪圖を

見ると我國の曹カト比前より立ふくちがたし似る物なり。
かの國は人病ヤヒに卧し居るさま。枕上よりはざれを立おけ
を病のゆゑをそのいひ傳へたり。かの國を昔源九
郎判官義經蝦夷へ渡らせしに、比ち義經は曹のくちがたの
り比地より遺りしを今に比ちをいひて、妄説を傳へし。東
鑑に義經も奥州衣川の館に、自害せらるし。其首を
斬キリて酒に泡し、鎌倉へ送りし事見えたり。賴朝卿又
梶原景時等、義經を憎むさま甚しく、ニセクビ贗首ニセクビを
ちかく受取おしりし事如く。然れを義經奥州より自害
せりし事疑ふべからず。比ちをうけりしは義經の

蝦夷渡り此事を言ひ惜^{ナラ}ま^ナ。此は蝦夷のうねぐねを以て
 強^ヒて義經の祠とす^ルなり。又近^{チカ}蝦夷^ノ辨慶崎^ノつふ處^ニあり
 とも。此名も蝦夷の詞にあ^リたり。右は義經の縁よりて松
 前^ノより名付^ルる名^ナなり。

此は蝦夷のうねぐねを以て強^ヒて義經の祠とす^ルなり。又近^{チカ}蝦夷^ノ辨慶崎^ノつふ處^ニありとも。此名も蝦夷の詞にあ^リたり。右は義經の縁よりて松前^ノより名付^ルる名^ナなり。

蝦夷クハサキ圖



クサリ鈴真鍮

地か子鐵

置物真鍮

洗草アヲカハ鎧ヨロイを古き物語に見えたり。是洗草を以て綴ヅりたる
 鎧ヨロイ也。すべて草威カハを薄ウソく草を細く裁キ多雨の端ヒを折マて中
 延ヒ置マて右の如く折マす。近世チカキを折マす。威カハは由ユ多タ両方リウは
 裁キり白く見え見ミる。又單草ツルカハは由ユ多タのびやまマく
 今世イマキ洗草アヲカハといふは白くやまマるかたカる草あり。是を
 古洗草コシカハといふは物モノははらハらラ古コに洗草アヲカハはらハらラ紅ベニ又
 漆シ多タはやまマらラらラ草カハの事コトなり。そは證シを。保元物語の
 異本イホ義朝幼少の弟共被誅條キチノチノチ又三人は君達各西ニ向ムて手
 を合せ禮拜ライハイしけり。そは哀アハれ。是を見多ミタ五十餘人の兵
 も皆袖スエを濡ヌく。其中に波多野が緋威ヒカハの鎧ヨロイは袖スエを
 洗草アヲカハしや成ぬらんと見えたり。此文印本コノキミ是ハ泣ナく涙ナミり
 て緋威ヒカハの袖スエを洗アヲひるが。そは色イロはらハらラ草カハにぬらヌく
 といふ意イなり。うは紅ベニの草カハを洗草アヲカハといふは如コト此コト以テ
 公家衆は傘袋シメバ皆モト持モトつ下部シモの著キる布ヌは狩衣カウイ
 をうは紅ベニに染シるを退紅タイベニといふ。退紅タイベニといふは濃ノく赤アカ
 真マコトの退紅タイベニ。退紅タイベニと書カてうは紅ベニぬらヌるをうは紅ベニと書カる。退紅タイベニといふは濃ノく赤アカ
 此色コノイロを洗アヲひるが。退タイけケる意イなり。此退紅タイベニの二字ニは
 訓コトをあらわす。此退紅タイベニは名ナを
 江家次第。延喜の縫殿寮式。其外古記。装束抄等にある。見
 多タ日本紀。天智天皇は御卷に。桃花布。衣服令サシふ桃花サシ衫サシ。

〇四季物冬の巻

〇十八

延喜の彈正臺式に桃花布衾。萬葉集に桃花褐あかなる。是等々れ桃花の二字を何らぞなを訓来ヨミぬ。桃花の色ハ薄紅あるが由あり。紅の色を洗退けしる意にもあり。ほりて何れを畧して何れぞめとりしゆ。又西官記。相撲御覽、日相撲、長并立合等著洗滌布袍云々。あはれ文を江家次第めは。相撲、長左右二人退紅袍と記されあり。こゝらの文を以て何れぞめハ洗滌の畧語ある事を知り。洗滌といふハ退紅タイコウを海事を知らず。又江家次第ハ荒滌と書する所もあり。是をあらざるをいふ詞に付て荒滌字の訓を假カしてあて字を用ひしはなや。古書よかやりの例いと多し。右ふ云

へはあらざるを洗義を以て洗草の事を悟サトり知チるなり。今世の人多く右の故實を知りて。洗草といふハ水み草ミヅミクサ此を多くぬらぬ薬を入れて洗ひするやうかある白き草の事をいふ。ゆゑを笑ふ傍き事あり。節用集フシヨウに。節用集フシヨウに。鰻頭屋宗二ウナズミヤムネニが作あり。宗二ハ林氏名公の弟子にハ逸。永正文エイヂは頃の人あり。西三條内府實隆をハとくすあり。洗系威アライイ見ミえたる。是洗滌アライ系威イあり。畧して洗系威アライイといふ。す紅に染する糸を以ておどしき。洗系威アライイあり。

甲冑名の事

かまらといふはよゆの古名なり。日本紀崇神天皇此

御卷子。時人號其脫甲處曰伽和羅。と見えたり。又古事記仁
德天皇の御卷。以鉤探其沈處者。繫其衣中。甲而訶和羅鳴故
號其地謂訶和羅前。と見えたり。右の伽和羅も訶和羅も其
によろひれ事をいふなり。又日本紀仁德天皇 令求其屍。泛
於考羅濟。と見えたり。此考羅濟即古事記に見えたる訶
和羅前の事をいふなり。考羅ハ訶和羅の轉語なり。轉語
を詞のいふまじきことなり。
よろひを上古かおんといへる。かおんをからしむるの略語
也。畧語は長き詞を約して短くいふ事なり。又轉語なり。からハ殼なり。あはハ開
ぬ也。草木の種を植て後。其苗生ずる時。必其殼を去る
芽を生ず。芽は頭に殼をかぶりて生はるなり。此義を以
てまづ堅き物をいふる物をかおんといふ。龜のから
かりらとも云ふ。屋の上はかまら。人のまゝよろひをまか
るの音を轉して。らの音をなしてかおんといふなり。か
らをかまらと書て非なり。日本紀古事記にまら。和の字を用
ひたり。あはれ字なり。瓦の字は訓を和名抄に加波良と書た
るは誤なり。瓦も甲の義なり。和名抄に和良と書べし。又和名抄に
相模國の郡名愛甲。阿由加波と訓を付たり。まらも加和と
付へきなり。和名抄にも
をり。如此の誤あり。

吾が國のまからわら。の義を以て名付るにあらざ。西土にも
も亦同意なり。甲の字篆書にまら。申如此なり。説文申の

見たり。源順を六十一代村上天皇の御代天曆年中の人
たる。其頃ふちやくかきらの事をよけいといひたり。

甲又鎧等の字。かわらひ本訓をりともいふを擬訓を也。訓
ハ文字のよみをいふあり。本訓とを何れ字にとも其字の毛
ちゆへはよきをいふ。擬訓とは其字の持主人のともいふ
らざれども義理通はるゆゑ外のちみとけをいふをいふ
也。擬の字をあそびふとよむ也。又義訓ともいふ。義理通は
るを以て也。日本紀齊明天皇比御卷に。鎧旗二具とある二具
の字をよそよけいを訓来たり。又源氏物語に。櫛置物さきもけ
け厨子ふたよろひ云々。榮花物語にも御手箱さきもけ一とあり云
々。義經記に屏風一とありむねどけり。何れも一具二具とい
ふ事あり。よろいともいふよりそろいむけ畧語にも寄齋ヨリトキあり

をいふ。具の字ハゆもともむ。物の彼カと此コと共に寄キとそろい
をいふ也。甲もかぶと兜と籠手すねあそけ類寄キ也。そ
ろいむを以ていふなり。軍のよろいといふべしを軍イ字を
畧してよろいといふ也。

鎧ヨロイの事ハ具足ヨロイといふ也。具足の二字ともいふなり。とよみ
ゆ。冑も胴も籠手もまきゆも何れカもとりそけい足
をいふなり。俗説ハ大將の鎧ををよろい
といひ平士の鎧をぶ具足ヨロイといふ。又一説ハ古制ハ鎧をばよ
ろむをいひ近世ハ鎧をを具足をいふ也。あそけけ類ハ俗
説にて曾々差別あり事なり。其制作キサもろそ差別をいふ。

其名ハそれよりハカシムル具足を毎以事なり。

うぶ事といふ事。信西入道が本朝事始に。或説は本朝事始

へて然。加布止者以言加布良牟止須也といふ事。笑ふべき

事なり。あやふ事ハかゝるに非ず。此畧語あり。たの音を轉

てていふ事あり。かゝるの蓋といふ事なり。ゆゑふ事

より物を覆ひふたぐ此義なり。

よだれかけを古代の書にあらはるゝの事ありといふ。日本

紀欽明天皇の御卷に。頸鎧の二字を以て之のよだれを訓來

たり。釋日本紀に。頸鎧と與多利加氣といふ物なりといふ。

阿かべといふ事あり。あかべの轉語。阿かべハあかべの轉りあり。

あかべの事あり。皆音相通なり。かきくけこ相べといふ事あり。

アガヒをいふ。腮邊なり。腮字アリ。アガヒハアガヒとい

ふ。音訓自然。又同。よだれかけハあかべの事あり。懸る由

あり。合さるるなり。又按日本紀に頸鎧を以て之の

よだれと訓を付し。誤りあり。既而前ハ甲の字を加

わら。訓付し。頸鎧を以て之の訓を以て。訓を以て

甲も鎧も同物なり。かゝるに非ず。いふべき事あり。

甲此字の事あり。是胴もかゝる。おとこといふ事あり。

廣くいふ。籠手も以て之を以て。皆甲なり。甲胄と二字連ねて

用ふる時は。甲ハよだれ。胄ハあかべ。然るに俗書に甲

〇四季抄卷の巻

巧^シく出^ル。多く其以上の考を以て古き製作を改^メ新^シ作^スはる事多^シ。さきバ近^キ製^メの中^ニもさきも慶^長天^正頃^ニに製^メる事多^シを手本^ニにして作^ラる^ルも^多。乳^チ繩^ヲを用^フふ^ルも^多。又^モ軍^學者^ハ此^ノ多^クみ^ノ上^ニは^ク巧^クみ^出き^依利^方也^トも用^フる^ルも^多。又^モ近年^ニは^ク引^キを^引き^しゆ^キ。其^ノ外^ニは^クす^クた^クぬ^クを^ぬき^しる^ル爲^メの用^心は^クな^りけ^レど^モ去^リに^出る^ルも^多。疵^ヲを^かく^ふら^ぬ爲^メの用^心は^クな^りけ^レど^モ物品^多く^ある^ルも^多。推^量は^クる^ルも^多。又^モ急^イで^著る^ル時^ノ物品^多く^ある^ルも^多。手^間を^遅く^ス。第一^ニは^クぬ^クの^所に^はな^りけ^レど^モ身^ハは^クた^らさ^クの^妨を^なら^ぬ爲^メ。昔^ノと^りに^はな^りけ^レど^モ物^ヲを用^フふ^ルも^多。利^ハあ^らず^に如^ク好^クむ^ルも^多。却^テ害^ヲを^なす^ルも^多。

問^フ云^フ。古^代を^甲冑^比下^にに^もみ^えば^シ。鎧^直垂^を著^るる^ルも^多。い^ふも^多。以^テ川の^頃と^り是^を用^フふ^ルも^多。事^ニに^あり^しも^多。や^{。答}云^フ。是^亦時^代詳^をら^ず。推^量は^クる^ルも^多。是^を鎧^炮渡^す。以後^ハ此^ノ事^ヲな^らず^に。古^代は^ク軍^中も^多。禮^儀を^濫さ^すも^多。直^垂を^著る^ルも^多。鐵^炮渡^す。合^戦は^ク勢^烈と^り。甲^冑の^製作^一變^{して}鐵^札を用^フふ^ルも^多。甲^冑重^くなり^しも^多。少^くなり^しも^多。輕^き物^多く^も省^略し^てい^ふも^多。輕^から^ん事^ヲを^欲む^ルも^多。矢^石は^ク防^ぐ要^器に^ある^ルも^多。足^手は^クひ^のき^りと^り物^多く^ある^ルも^多。上^ニは^ク甲^冑比^おも^みを^増さ^ん事^ヲを^慮む^ルも^多。又^モ陣^羽織^を著^るる^ルも^多。直^垂は^ク省^略せ^し。

あるが、古代の禮儀の爲に用いたを、後代に禮儀はかく
とるより便利なり、此も走る戦國の風俗なり。されども豊
臣秀吉公九州出陣の時、赤地錦の鎧直垂著せし由太閤記
やらん予見えし。是を近代もよく此事如き。

問云、討死と思ひ定免る日、曹の緒を濡むすび、餘
り切き、又母衣を臺に上流といふ事、定法なりや如何。答
云、凡武上る者ハ出陣の日より討死と思ひ定むべし。生
歸る者ハ不覺悟なり。此も今日も討死以
日。今日ハ討死せざる日、事ハ何ぞか。曹ハ緒を
切る事。母衣を臺に上るにやらんハ事、人々此好むに流

うに流し事なり。是より主君貴人の仰を承り。又
古事より物申上るを必曹をぬき、軍中此禮なり。
緒を結ひ餘り切て捨るを急し曹努け流す。又それ
はうぬらんをす。にてもあはれまじり。母衣を臺に上
る事、武田信繁が志、初由甲陽軍鑑、うらん見えたりと
あはゆ。古書に母衣を臺に上流といふ事、曾見流る事なり。
古画をみても其躰画、多々物れし。甲陽軍鑑の中、古書を
事實相違、此事ありて偽多し。取るにたらざる書あり。
問云、古制の鎧は相引を覆ふ物。左ハ鳩尾の板を用ひ、右ハ旗
檀の板を用ひて両方同しからしむるを如何。答云、此事古書み

其故實を記しある物をとりて何をもいふべからず。今按ずるに凡敵と戦ふは必片身みなり。左身を敵に向けて兵刃を執りて右手を左の方へ指し出して働くも好なり。此を右に鳩尾の板を付せむ。鳩尾の板ハ強直めて屈伸好む。此をよむ。其板の端に直垂れ袖小手の袋あり引か、其妨中好むゆゑ。右ハ鳩尾の板を用ひて、柔軟にて屈伸自由ありせん。此板を用ふる事なり。

又問云。右の如くせん。左の板屈伸自由ありて利用する物なり。左にもせん。だんの板を用ゆる事なり。左に鳩尾の板を用ふる如何。答云。右に相引の邊を右の手本みして右の臂に上り下り働く處あるゆゑ。屈伸自由ありせん。だんの板を用ふる事なり。左の相引此邊を右に手先の働く處あるゆゑ。左もせん。せん此板を用ゆる事なり。柔軟にて多ひらるゑ動く。太刀打は毛槍もるも弓射もにも却て妨む。此は故。左ハ強直ある鳩尾の板を用ふる事利あり。左ハ腹巻筒

又問云。右に方にせん。だんの板を用ふる事利あらむ。腹巻筒丸も右の相引ありせん。だん此板を用ふる事なり。左に右も子杏葉を用ふる如何。答云。鎧の鳩尾板も杏葉より其多け長き物あり。故。右の臂に働の妨みなり。此は鳩尾板を用ひてせん。だん此板を用ふる事なり。杏葉ハ短き

物は右の臂に働のさふけみぬず。さふぶ腹巻も筒丸も同様に左右中母より杏葉を用ふるも案。

又問云せんぎんの板は名ハ古書にも見えたり。鳩尾板小出羽をさういふ名を古書に見えず如何。答云。古代せんぎんの板をいふも左右の物は惣名と見えて。も一具の物みしを左右へわらせられむ。木の葉の一莖にこそ二葉を依にきや。俗にせんだんハ二葉とりていへり。いふ諺はふたりを旃檀板と名付しあるなり。両方此形違たふりよ。後ハ左の方なるをバ小出羽も鳩尾板をも名付て左右のさふけをぬし。さふぶ人小出

羽も小出葉めてさふあはる二葉此意なる字。鳩尾ハ此形の似きを以て名付しぬるなり。

又問。大袖の水吞は緒の環の座金物を袖の幅半分をどみ長くはる事如何。又何由名水吞の緒をいふにや。答云。唯文饒をいふにさるるあり。古記鎧は袖すは金物長うらぬも何也。是を以て長きを唯文饒とかりと知るべし。又さの此緒を名付し事未詳なり。推量を以ていふ。鎧はあけまねをさるといふす。袖の緒をぶをさるといふ。さの横手にゆひ付るあり。蜻蛉ハ水は上をさるといふ。尾を水にぬらし。水のみ如くはる物あるは。それ縁を

引て水のし緒をひきよめたり。或る証據ハナリ。

又問古き繪に武者を画ききふを見るに左みも鎖籠手クサリコテ 形をわく右みも弓籠手ユココテ たる跡見えたり。弓籠手ハ左にみそきくは右にみ事ハ如何。答云。弓籠手さしはみハあらは。鎧直垂ヨロヒヒタレ を著て左の袖ハ濡く上アゲ 多肩カダ の邊に結留ムスビト ぬ右の袖をまくり上アゲ して手テ につく袖スベ につくし緒を引きて結び留ムスビ ぬ。後跡を画きしるが弓籠手さしきる如くみ見ゆはなり。

又問よだをかけ又何がゆき付るを何の爲そや。答云。延懸ヨダリカケ

又問。古き繪に付る事古式コシキ なる曾て無其事なり。あけゆき付るを弓射るはも太刀打にも何なるも何事多に妨サマシ なるも悪ワル なる。古式コシキ なるは事なる。近世鎧師明珍アキラ が新作して。曹ソウ けけきた。鎧のあけまふとたりかけのあけゆきを三ミ のゆきと稱して家の古實なるをゆき由聞及べり。明珍ハ工匠コウテイ 此家コノイヘ なるは武士のまごころに。鎧ヨロヒ なるゆきハ物モノ 花麗ハナヤカ に飾カズ るを事コト とす。ひて延懸ヨダリカケ なるあけゆきを付るを妨サマシ なる事コト なるに。古式コシキ 無事ムジキ を仕出シダシ たるは。又問。鎧ヨロヒ のおし付ツケ なる逆板サカ あり。是ハ何れ爲み付る

子也。多く銹がかりし付ふにや如何。答云。古代の鎧を胴は
裏を草紙以て張はて置たく。堅く綴さる由は胸板も押付
も。柄がきあやを引立まぶ伸び下にす急置ハ縮やに
しらき。物なり。脊の方あり。肩ほりの下邊は一个所。
横きは左より右まで一文字に透間を設く。是ハ脊の屈
伸を自由にせんが爲なり。其透間をふさぐべし爲に逆板
を上より垂れ掩ふなり。其逆板の裏より胴へつけ毛引
に綴てはあざ置あり。それ毛引ハ一の文字のすじは
上より下へ。逆板を上へ引上まぶかの毛引は所は
伸び。逆板を下へ垂れ下れむ。これ毛引あるむあり。たるあり

逆板がさしと動きあり。ゆゑに戦ひ働く時は逆板は
後よりぬき。逆板は座金物を打ち環を付け。其環にあ
げぬき。付て逆板の壓に。その物あり。其壓はゆるぎ
あり。太く組緒にて総も太く長くさるあり。是ハ重くせ
んが爲なり。さし鎧は両袖前へ出まぶ。妨まふ。故。袖の水吞
は緒をあけ。柄きの両方の横手は。これへは。留置あり。柄
は。柄の上は。逆板は環に付る料。両方の横手は。柄
を。両袖は。水吞の緒を結付べき料あり。如此三は。ハ必用
の物あり。さし。柄。付る事何を表し。彼を象る。さし
この事を探求する。及する事あり。此事は知らぬ人色々

はくは邪説をいひぬらすてあやまりをや。

問云。古代の鎧ハ胴のきけ甚短きと如何。答云。古製の胴も今の胴も同じくけきをもぬ。古製ハ申多しの糸は付處胴志の貳寸ほど上より付るも急胴短きやうにゆるなり。今製ハゆるしの糸は胴志より付る由急胴長く見ゆるれ也。

又問古製の鎧もあぎの糸は胴志より貳寸ほど上げて付る何の爲ぞや。答云。古製ハゆるしの糸の長さ貳寸五分はゆるし。ゆるしの糸を胴志より二寸ほど上げて付る故。胴の下は方えゆるし。此糸の陰カケよりくれてある也。

ゆるし此糸の處危アヤシな事れ。今製を申多しの糸を胴志より端ハシより付け。且ゆるしの糸は長さ四寸ばかりありて股モの上にかゝる也。ゆるしを此糸は陰透カゲスキて何もれくゆるしをゆるしを此處甚危。古製の如くゆるしをゆるしな事れ。

又問云。古製はゆるしの糸二寸五分はゆるし。此長きにて。胴尻シより二寸ほど上り付るに。上帯ウサをせむゆるしの糸大方ハ帯にあられて。草摺クサズリは此あかき滞トホりて歩行の害み。ゆるし如何。答云。今世の草摺クサズリは裏より草。又布れどをゆるしをゆるし草摺をあかぬやうに作る。古製ハ草摺の

裏子何もあつては、とあがくあり。されどあき此
系の短きに上帯をかけた結ひきりこも。草摺のあつたの
害にえぬあり。古製を草摺のこみ限らば。胴も袖も裏
に草あどをあつて、さうわつる事ぬくのむちみあか
くやうあきある物なり。又古製は鎧の草摺ハ前後左右
都合四下^{サガ}なり。其内右の草摺を脇楯^{アテ}に付てあり。胴の右
の脇をを闕^{アテ}てあるゆゑ、是は闕^{アテ}ある所を脇^{アテ}あつてふ
さうれ也。

又問云。古製ハ胴の右に脇をを闕^{アテ}て作り。脇楯を以て其闕^{アテ}
あつた所を帯きくやうに、は、何の爲ぞや。答云。俄あつ時
鎧を早く著るに、古製の鎧を籠手をこつて、付
あ事を、今世のやうなる、籠手は、物を用ふは、
先は、左に籠手を、緒を結ぶ直垂を著
し。四のこつてを結び脇楯を、緒を結ぶ。是を小具足^{コグヅク}此
出立^{イテタテ}の陣屋に、常に此躰あつ居るなり。は、俄に敵
あつた時、は、鎧を取て肩に、け著は、
何の手間も入らぬなり。近世の鎧を著に、
手間あつ事なり。

又問甲冑を、事古より有るや。答云。札^{サキ}と
事太平記、みを見え、古代も有る事ぬる。然

信友云全戦後の俗女の打掛衣は事をたふさぐ物にせしむべしと云言ゆべし

事なり。保侶はく介冑を助る事以ぬを保侶ハヤシラケル
むらぬく物なるゆゑ矢を射りけりも矢の勢ぬけて介冑
を貫く事知らぬなり。右の鑑囊抄三代實録の文を以て古
代の母衣此用ひ方考へ知はべし。後代鐵炮渡り後ハ
軍に弓矢を以て攻め防ぐ事疎^{オモカ}なり鐵炮を專^{オモカ}用ふる
事此を母衣して矢を防ぎ事此れ多^{オモカ}故はらハ何^{オモカ}ニ
なる物^{オモカ}知^{オモカ}ぬ事^{オモカ}に^{オモカ}此^{オモカ}は^{オモカ}何^{オモカ}なり。此邪説を以
ひ^{オモカ}後^{オモカ}代^{オモカ}母^{オモカ}衣^{オモカ}多^{オモカ}矢^{オモカ}を^{オモカ}防^{オモカ}ぐ^{オモカ}事^{オモカ}絶^{オモカ}て^{オモカ}無^{オモカ}用^{オモカ}
の物^{オモカ}此^{オモカ}も^{オモカ}古^{オモカ}より^{オモカ}有^{オモカ}り^{オモカ}來^{オモカ}り^{オモカ}物^{オモカ}此^{オモカ}も^{オモカ}捨^{オモカ}て^{オモカ}も^{オモカ}於^{オモカ}れ^{オモカ}
ば^{オモカ}籠^{オモカ}を^{オモカ}包^{オモカ}み^{オモカ}負^{オモカ}ふ^{オモカ}名^{オモカ}指^{オモカ}物^{オモカ}の^{オモカ}類^{オモカ}に^{オモカ}なり^{オモカ}なり。

母衣此製古今の替りあり。母衣の事を先年予が著しある保
呂衣推考といふ書に委細に記し置きまはしりて畧し
多^{オモカ}其^{オモカ}大^{オモカ}網^{オモカ}の^{オモカ}り^{オモカ}を^{オモカ}擧^{オモカ}て^{オモカ}答^{オモカ}ふ^{オモカ}なり。

又問云。唐の國も母衣を用ふる事あるや如何。答云。母衣
ハ我國にも用ひて唐にも用ひる物なり。或ハ母衣を漢
の王良とて始ふなり。或は張良より始るといふ。或ハ樊
噲より始るといふ。説あるも母唐に書り見えざるは
妄説なり。或ハ唐の旼といふ物を以て我國の母衣に引あ
つては説も母衣を牽強附會の説を取らざる足らざ
るなり。

又問云。蘓子瞻のふ人。東坡居士とも號す。宋の代に
大儒なり。此人の著しむる殘儀兵^{ザキ}的^イといふ兵書あり。其
兵的中に漢傑之儀といふ篇あり。その中に魏の事見
えり。然れを唐に母衣れしや。そのいふ如何。答
云。殘儀兵^{ザキ}的^イといふ書予も讀みたり。其書に太公望の婦人
に化して張良の夢に見え。六韜を授け後に又魏^ホを授け
し事を書て。終に太公望を觀世音をり。黃石公の摩利支天
をそれといひ。又普門品などの文を引きは所もあり。其
文章の拙き事甚し。按ふに日本の愚昧淺學の出家などの
作ありん。おのをも作する人々の信せざらむ事お恐れ
る蘓子瞻が名を借るるも此あるなり。文章の事ハ曾て知ら
ぬ予が眼に多し。何さほしく拙くおぢゆを。學者の眼
にははらへたれ。かく屎^シはかしくは母見ゆら免。かく不偽
作の書見えある事ハ取るにたらず。

武士學文問答

問云。武士も唯武^ブ藝^イををけし習ふ。學文のほる事及ば
ず。唐の事ハ知らばとも事おけ。詩を作し歌をよむれと
ほるも心おほむとも。武道の害あるも此ありといふ。人お
し如何。答云。學文は主^シ意^イハ唐の事を知るべき。為はは
らば。又詩を作し歌をよむ事ハ為しあらば。人の人お

道を知て身の行ひを正しくせんが爲なり。それ人五倫
の道なり。五倫を父子君臣夫婦長幼朋友是なり。此の五
倫の身に行ひ方を道と云ふなり。其道を之ハハハハ知らん
が多かり。聖人の書をよき習ひ口釋を聞くを學文といふ
なり。其道を委しく知たりも其道を身に取て行ひざ
るを學文と云ふなり。其道を身み取行ふ人を善人とい
ひ。五倫の道に背きわがゆゑ無法なるを悪人といふ
なり。武藝を何れと違へたりとも五倫の道に背きわが
るべし人のたぐひも何れも禽獸キンジウ不同なり。文武と
いひも文と武とはあはざる道なり。武の道ハ人の所領國
郡を奪ひ取るべし爲の道にたゆみず。此の五倫の道に背き
悪事成れし世の害なり。悪人を誅罰し亂を去るべし。此
爲此道あり。此武田信玄のごとき軍を用ふ事巧
なり。此を以て無學に云ふ。道を知らば其父信虎を
追ひ出さず國を奪ひ取り不孝の悪名を後世に遺せり。
恥しむ事なり。此や此れは武士たる者。學文せざれば
て道を知らば武事に於て何れも多し。此を以て。

此一冊孫らが爲に記しぬ。幸ふ雪降り老の身此手の古
く作る故志のいほ、書おろりぬをむ。此書を名はけ
る冬艸をいふ。

安永七年戊戌十一月七日

伊勢平藏貞丈書

四季艸七之卷 大尾
此書は、
伊勢平藏貞丈の書
安永七年十一月七日

絡石舎藏版

天保八酉年官許

江戸 須原屋茂兵衛

同 須原屋伊八

同 須原屋佐助

京都 上阪 庄次郎

大阪 秋田屋太右衛門

若山 阪本屋喜一郎



發行 書林

